注意事項

①この映画は長編アニメーション映画である。故に、この映画はカメラによって撮影された映像を編集したものではないが、画角やズームアップを説明するために、映像が空想上のカメラによって撮られているとみなす場合がある。

②登場人物や劇中の風景といった虚構世界の事物についてではなく、編集時の操作や上映の際の注意事項といった演出について言及する際は、「編集：」「注記：」と書いてある。

③この映画は雪だるまプロのＮＦ上映会で上映することを前提としている。上映会の機械操作スタッフは、必ず江玲奈役の人間とレベッカ役の人間にすること。江玲奈役の人間とレベッカ役の人間は、髪型や話し方などを劇中の二人に似せ、雪だるまプロのパーカーを着ること。上映開始時のアナウンスは、レベッカ役の人間が明朗とした語り口で行い、江玲奈役の人間がＰＳ３を操作すること。

登場人物

九条江玲奈（くじょうえれな・26）
　レベッカ・コーンフィールド量子物理学研究所の副所長。
レベッカ・コーンフィールド（Rebecca cornfield・16）
　同研究所の所長を模したＡＩ。所長本人は不在。
安井亜麻（やすいああさ・55）
　同研究所の所員。
沢口めり（さわぐちめり・24）
　同研究所の所員。
新井真音（あらいまのん・22）
　同研究所の新入所員。
篠崎かなめ（しのざきかなめ・14）
　エヴェレット機構の首席監察官を務めるＡＩ。

Ｓ１　研究所の廊下・江玲奈の部屋

見学者の子供たちとその引率であるめりが研究所の中を歩いている。その後ろを報道陣が歩く。研究所は白と青を基調とした近未来的デザイン。

編集：「脚本：○○、演出：○○」のようなクレジットを、彼らが歩く映像の上に重ねる。以後クレジットは順次表示さ

れる。
研究所にはさまざまな計器が置いてあり、白衣を着た技術者がいる。子供たちは大きな部屋に入る。奥にある扉から、江玲奈が入ってくる。報道陣がカメラのフラッシュを焚く。
亜麻が司会を始める
亜麻「それでは、江玲奈さんになにか質問のある人！」
子供たちが矢継ぎ早に質問を浴びせる。映像の上にニュース番組のテロップが被せられている。「コーンフィールド研究所一般公開　子供たちに九条氏が困惑する一幕も」と書かれている。
子供たちは一斉に質問を浴びせる。江玲奈は緊張してしまい、扉へと走っていく。
亜麻「ちょ、ちょっと、九条先生？」
ナレーターA
「元気いっぱいの子供たちに九条先生もタジタジ」
ニュース映像は、インタビューの映像からディゾルブして、研究所の入り口にある看板や所内の巨大な機械、レベッカ・コーンフィールド所長と九条江玲奈副所長のツーショットを素材として使用したニュース映像に切り替わる。
ナレーターA
「レベッカ・コーンフィールド量子物理学研究所は、多世界観測の第一人者、レベッカ・コーンフィールド氏が設立した研究所であり」
空想上のカメラがズームアウトしていく。ニュース映像は江玲奈の部屋に多数あるディスプレイのうちの一つに流れていたことがわかる。画角が広くなっていくと同時に、ほかのディスプレイに映された別のチャンネルの映像も見えるようになっていく。
様々なチャンネルの音声が混ざって聞こえる。
ナレーターB
「多世界観測とは、九条氏が打ち出した「多世界間トンネル効果」に基づく」
ナレーターC
「いま私たちが暮らしているこの世界と並行して存在する世界から、次元の壁を越えて飛んでくる素粒子を」
ナレーターD
「並行世界とエンタングルされた量子を観測することで間接的に私たちとは別の世界に暮らす現実が」
空想上のカメラがズームアウトして、椅子に座りながらテレビを眺める江玲奈と複数のディスプレイが同時に映るような画角になる。

コメンテーター
「それにしても、しどろもどろでしたねぇ～」
別の番組のコメンテーター
「いかにも象牙の塔に引きこもった研究者って感じで」
さらに別の番組のコメンテーター
「もうちょっとピシっとしてた方が」
すべてのテレビ番組が江玲奈の顔を流している。江玲奈はテレビをすべて切る。
編集：「製作・著作　雪だるまプロ」というクレジットの後、タイトルが表示される。
ため息を一ついた後、江玲奈は手元のコンピュータを操作する。プロジェクターが空中にアイコンやキーボードのホログラムを投影し、江玲奈はそれを手早く操作する。
ブォンという起動音とともにブティックのマネキンのようなのっぺらぼうのアバターが江玲奈の視界に投影される。
江玲奈「既存の外見と人格を使用」
江玲奈は手元の記憶媒体を、顕微鏡のような形をしたＰＣの端末に挿入する。挿入された記憶媒体は、ブリリアントカットされた宝石のようなものを台座に差し込む形式。以後物語に登場するデータ保存装置はすべてこの形をしている。
記憶媒体を挿入すると、ＰＣに「インストール中」と表示される。
アバター「インストールが完了しました」
アバターの外見が足元から徐々に描画されていく。投影された外見はニュース映像で見かけたレベッカ・コーンフィールド、その人である。
背丈や顔つきから高校生ほどに見える彼女は白衣を着ている。ただし、ニュースの映像でははつらつとした笑顔を浮かべていたレベッカは、気の抜けた顔でぼんやりとしている。
江玲奈「名前はわかる？」
レベッカ「えっと……レベッカ・コーンフィールド？」
江玲奈「年齢は？」
レベッカ「……16歳」
江玲奈「これは？」
江玲奈は手に付けた古びた指輪を見せる。指輪には青色の宝石が付いている。
レベッカ「……指輪？」
江玲奈「初期設定は成功みたいね」
レベッカ「私、どうしてここにいるの？ここはどこ？私はだれ？」
江玲奈「順を追って説明するね。ベッキー」

レベッカ「……ベッキー？」
江玲奈「そのデータはプリインストールされてないか。……ベッキーは、レベッカ・コーンフィールドのあだ名。Rebecca だから、Becky」
編集：ディスプレイに表示されている、英字でつづられた名前を映す。
レベッカ「……うん」
江玲奈「ここは、レベッカ・コーンフィールド量子物理学研究所。多世界観測という技術を研究してる」
レベッカ「……私の研究所なの？」
江玲奈「そう」
レベッカ「なんで？」
江玲奈「それも、あとで説明する」
レベッカ「そっか……多世界観測っていうのは？」
江玲奈、咳ばらいを一つしたあとに説明を続ける。
江玲奈「……エヴェレットの多世界解釈によれば、この世界は何かのイベントが起こるたびに「起こった世界」と「起こらなかった世界」に分岐している。それが電子の衝突や原子核の崩壊といったミクロな現象だとしても」
江玲奈は身振り手振りでホログラムを操作してレベッカに説明する。
江玲奈「私たちが生きている現実とは違う分岐をたどった、「そこに存在したかもしれない世界」。それを観測するために、次元の壁というポテンシャルを超えて飛んでくる無数の素粒子を使うの」
説明用のＣＧが挿入される。江玲奈とレベッカの声はナレーションとして挿入される。
レベッカ「うーん……」
江玲奈「素粒子は直接観測すると壊れてしまうから、量子エンタングルメントによって」
レベッカ「ん？」
江玲奈「二つの素粒子の運動量と位置を観測してＥＰＲパラドックスを利用することで不確定性原理を回避し、」
レベッカ「ちょ、ちょっと！そんなにいっぺんに言われてもわかんかんないかな……」
江玲奈「えっと……とにかく、この世界と並行して存在する別の世界を観測する技術、それが「多世界観測」。その監督のためにエヴェレット機構が日夜目を光らせる、人類が持つ最も優れたテクノロジーの一つ。うまく利用すれば明日の夕食からこの国の政治まで、すべての選択肢を実験することなく調べること

ができる」
言いながら江玲奈はＰＣを操作する。
レベッカ「エヴェレット機構っていうのは？」
江玲奈「世界に15ある多世界観測装置が正しく利用されているかどうか監視する機関、それがエヴェレット機構。この世界と完全に同じ世界を観測することは出来なくても、限りなく私たちの世界に似た世界をいくつも観測すれば、過去も、未来も殆ど正確に言い当てる事ができる」
レベッカ「ふむふむ」
江玲奈「だから、それを悪用すれば様々な悪事が可能になる。ギャンブルや株の結果を知るだけならいいけど、ある国の大統領が今どこにいて、いつ警備が手薄になるかさえ言い当てることができる。それを防ぐために観測を監督しているのがエヴェレット機構」
先と同じく説明用のＣＧを挿入。ホログラムっぽい世界地図などを用いる。
レベッカ「ふむふむ……なんかいっぺんに聞きすぎてよくわかんなくなっちゃったけど、まあ、いっか」
江玲奈「わからなかったら何度でも説明するわ。で、この研究所はエヴェレット機構の監督のもと日々研究を続けているのだけれど、所長が今長期休暇を取っているの」
レベッカ「所長……っていうのは、私のこと？」
江玲奈「そう。正確には、あなたの元になったオリジナルの人格が所長で、あなたはそのコピー。私はその研究所の副所長」
レベッカ「ふむふむ。……ってことは、その人は私であり、私のお母さんなんだね」
江玲奈「そ、そうね。その認識で間違ってないと思う。それで、あなたには、あなたのお母さんのデータをインプットするから、彼女が休暇を取っているあいだにその代わりを務めてほしいの」
レベッカ「……ええっ！？ちょっと待って？私がお母さんになり替わるってこと？」
江玲奈「心配しないで。記憶を上書きするわけではないし、あなたの人格を改変するわけでもない」
レベッカ「……ふむふむ」
江玲奈「これからあなたにはほかの世界の所長を見せるから、それを見て所長の考え方を学習してほしい。そうすれば、所長と連絡が取れなくても、あなたが考えたことに従えば所長の判断に間接的に従うことができ

る」
江玲奈「あなたはあなたのままで大丈夫。少し力を貸してほしいだけ。……するかどうかはあなたに任せるわ。もし断ったとしても、ほかの方法を探すから」
江玲奈、レベッカを見つめる。
レベッカ、江玲奈を見つめる。
レベッカ「……うん、分かった。とにかく、私が頑張ればいいんだよね」
江玲奈、レベッカを見つめたあと、一瞬の間ののち笑う。
江玲奈「ありがとう。そうと決まればよろしくね。ベッキー」
レベッカ「あなたの名前は？」
江玲奈「私は九条江玲奈」
レベッカ「江玲奈ちゃんかぁ……じゃあ、よろしくね、エリー」
江玲奈、一瞬ハッとするが、すぐに返答する。
江玲奈「よろしく」
レベッカ「よろしく！」
江玲奈とレベッカ、握手。ただしレベッカの手はホログラムなので貫通したり透けたりしている。
江玲奈「それじゃ、早速だけど、観測を始めるわね」
レベッカ「うん」
江玲奈「なるべく似たような世界を選んで観測しているから、よく似た私たちが見られると思うわ」
江玲奈、ＰＣを操作して多世界観測のコンソールを開き、レベッカのデータを入力する。その後江玲奈は円筒形の公衆電話ボックスのような形をした機械に入る。
レベッカ「それは？」
江玲奈「量子エンタングラー……は分からないか。簡単に説明すると、ほかの世界の私を観測するために、いまの私のデータをインプットするの」
江玲奈の身体を上から下に向かって螺旋を描くように光線が走査する。
光線が体をすべてスキャンし終えると、江玲奈はコンソールの操作に戻り、「起動」と書かれたホログラムのボタンを強く押す。
研究室の観測装置が起動する。別の世界から飛んできた無数の素粒子が観測されひとつの世界が現出するのを、素粒子一つひとつの粒が見えるミクロな視点で描く。
部屋のモニターに表示された進捗状況が一〇〇％に達し、再生ボタンがポップアップする。
レベッカ「ここ座っていい？」
レベッカは江玲奈の横に座ろうとする。
江玲奈「いいよ」

江玲奈「見る？」
レベッカ「うん」
江玲奈「それじゃ、再生するよ」
　江玲奈は再生ボタンを押す。机の上にあるプロジェクターが部屋の壁に映像を映し出す。
　空想上のカメラは、二人の後ろ姿、二人の間にあるプロジェクター、そして部屋の後ろに投影された観測結果を写している。徐々にカメラがズームしていき、投影された映像のみが画角に入るようになる。
　注記：このとき上映会会場においてもレベッカ役と江玲奈役の人間の間にプロジェクターがあり、前方のスクリーンにこの映画が上映されているということを、読者の皆様には留意していただきたい。

S2　江玲奈の部屋・学校の寮
　観測先の江玲奈とレベッカは、学校の寮のような場所にいる。洋館のような見た目をした部屋の中には古びた家具（二段ベッド、机、本棚など）がある。
　レベッカは右手に青色の指輪を付けている。彼女は床に座って革製の旅行鞄に衣服を詰めている。
　二段ベッドの下の段に座り込んで本を読んでいる江玲奈が、レベッカに話しかける。江玲奈は三角形の形をしたヘアピンを付けている。
江玲奈「あちらでは何をして過ごすの？」
レベッカ「何だろう……でもきっと、おばあちゃんの家でもきっと楽しいことがあるよ」
江玲奈「そうならいいけど……イギリスは食事が美味しくないんでしょう？」
レベッカ「そうなの？」
江玲奈「ああ、でも、お紅茶は美味しいって、本で読んだよ」
レベッカ「本当？うれしい」
江玲奈「味分かるの？どうせ白砂糖をたっぷり入れるのに」
レベッカ「えー？それがいいのに」

　観測結果を見ながら、江玲奈とレベッカが話す。
レベッカ「私、甘いものが好きなの？」
江玲奈「うん。これ飲む？」
　江玲奈、味覚入力用のデバイス（コーヒーメーカーのような形をした機械が江玲奈のデスクに置いてあり、コーヒーを注ぐノズルに当たる部分に細い針がある）に自分のコーヒーを置く。針が伸びて先端がコーヒーに浸かると、レベッカの手元にコーヒーカップのホログラムが現れる。レベッカ

はそれを一口飲む。
レベッカ「うぇー、甘すぎるよ」
江玲奈「所長はいつもこれぐらいの甘さで飲んでる」

レベッカ「何読んでるの？」
　荷物の準備をしながらレベッカが聞く。
江玲奈「シェイクスピアの、『テンペスト』」
レベッカ「わかんない……」
江玲奈「We are such stuff as dreams are made on.」
　江玲奈、イギリス英語風の発音でシェイクスピアを引用する。
レベッカ「私たちは夢と同じものでできている、ってこと？」
江玲奈「シェイクスピアによれば、ね」
　江玲奈、立ち上がってカーテンを開ける。
江玲奈「……英語使ったのが篠崎先生に知られたら、怒られるね」
　空には軍用機が飛んでいる。建物は高台の上にあるらしく、森の向こうに瓦葺きの屋根の家がたくさん、その向こうの海沿いに埠頭や煉瓦造りの倉庫が見える。
レベッカ「……イギリスなら、シェイクスピアの劇も見られるかな」

　レベッカ、荷物の整理を終える。
レベッカ「よしっ。準備終わり！」
　レベッカが立ち上がる。江玲奈とレベッカは向き合っている。
レベッカ「じゃあ、また会おうね」
　レベッカ、鞄を持って部屋の外に出ていこうとする。
　レベッカが扉を開けたところで江玲奈が声を上げる。
江玲奈「待って！」
　レベッカ、江玲奈に背を向けたまま立ち止まる。
江玲奈「本当に、本当にいっちゃうの？」
レベッカ「……うん」
　レベッカ、歩き出す。江玲奈は走り出してレベッカに後ろから抱き着く。
江玲奈「行かないで……行かないで……」
レベッカ「行きたくないけど、行くしかないの」
江玲奈「いやだ！私、ベッキーがいないと生きていけない」
レベッカ「大丈夫だよ。エリーは私が居なくても生きていける」
江玲奈「そんなこと言わないで！」
レベッカ「言うよ」
　江玲奈、黙る。

江玲奈「ねえ、本当になにか方法はないの？」
　レベッカ、後ろを振り向く。振り向いたレベッカは首を横に振る。
レベッカ「どうしようもないのは、エリーが一番わかってるでしょう？私はエリーの国で生きてはいけない。エリーは私と一緒にいちゃいけない。エリーまでスパイだって疑われちゃうよ」
江玲奈「いいよ。疑われたっていい。疑われて、捕まって拷問を受けたって、私は」
　レベッカ、江玲奈の口をキスでふさぐ。
　現実世界のレベッカはそれを見て驚く。
レベッカ「……ごめん。ありがとう。でも、そうなったら私が悲しい」
江玲奈「……ごめんなさい」
レベッカ「もう、行かなくちゃ。きっとまた会えるよ」
江玲奈「いつ？」
レベッカ「いつでも」
　レベッカ、指輪を外して江玲奈に渡す。
レベッカ「これ、あげる」
レベッカ「こうしないと、本当にお別れになりそうだから。交換しよう」
江玲奈「私、渡せるものなんてないよ」
レベッカ「じゃあ、これ」
　レベッカ、江玲奈のヘアピンを指さす。
江玲奈「……これでいいの？」
レベッカ「うん、ちょうだい」
　江玲奈、レベッカにヘアピンを差し出す。
　レベッカ、ヘアピンを付ける。ヘアピンを付けたレベッカは微笑む。
レベッカ「私が居なくても……」
　レベッカ、涙ぐみながら江玲奈の頭をなでる。
レベッカ「私が居なくても、元気でね」
江玲奈「……うん」
　遠くから車のエンジン音。廊下の奥にある玄関には車が止まっている。
　レベッカ、玄関に向かって歩き出す。
レベッカ「それじゃあ、またいつか」
江玲奈「うん」
　江玲奈、去っていくレベッカを見送りながら両手で指輪を握る。

ＴＶの電源を切るような音とエフェクトで画面が暗転する。

Ｓ４　江玲奈の部屋

江玲奈とレベッカはテレビを覗き込んでいる。空想上のカメラはそれをテレビの側から撮る（つまり正面から撮った江玲奈とレベッカの顔を撮る。

注記：このとき、上映会会場においては江玲奈とレベッカが江玲奈役とレベッカ役を覗き込むような形になっていることを留意していただきたい。）

レベッカ「……終わったの？」

江玲奈「これで終わり」

江玲奈、手元のディスプレイを見る。ディスプレイにはA.D. 1940と書かれている。

レベッカ「これって、よく似た世界の映像、なんだよね」

江玲奈「そう。私たちが現実と似たような形で存在する世界を選んで観測しているからね。今のは第二次世界大戦前夜の日本に近い世界でしょうね」

レベッカ「そうじゃなくて……えっと、恋人同士……なの？」

江玲奈「そう。所長は私の恋人」

レベッカ「えぇっ！？」

江玲奈「何か問題でもある？」

レベッカ「あるよ！そんな、いきなり言われても……」

レベッカ、江玲奈の指輪を見る。

レベッカ「じゃあ、その指輪は」

江玲奈「これ？ベッキーに貰ったの。いいでしょう？」

江玲奈、左手の甲を表にして、薬指に嵌った指輪を自慢する。

レベッカ「うーん……」

江玲奈「どうしたの？」

レベッカ「だって、私とあなたが、け、結婚してるってこと？」

江玲奈「あなた、じゃなくて、エリーって呼んでほしいな」

レベッカ「え？」

江玲奈「所長は私のことをエリー、と呼んでるの」

江玲奈、遠くを見る。

レベッカ「それはそうかもしれないけど……」

江玲奈「……ごめんなさい」

江玲奈のもとに所員から連絡が入る。

江玲奈「分かりました、ええ、すぐ行きます」

江玲奈、立ち上がる。

レベッカ「どこいくの？」

江玲奈「仕事」

江玲奈、部屋を出ていく。レベッカは宙を浮いてついていく。

S5 研究所の廊下　研究室

江玲奈とレベッカは研究所の廊下を歩く。この時、のちのシーンで登場する外階段を経由する。

研究所の廊下の天井はガラス張りで、日光が差しこんでいる。

江玲奈とレベッカはほかの所員とすれ違い、所員は江玲奈に一礼するが、所員たちはレベッカのことを視認できない様子。

レベッカ「私のことって、ほかの人には見えてないの？」

江玲奈「私のこのゴーグルには映ってる」

レベッカ「なるほど」

やがて二人は一辺百メートルの正方形のような形をした研究室にたどり着く。部屋は半透明の液晶パネルで二つに仕切られていて、こちら側には制御パネルのようなものが、向こう側には巨大な機械が存在する。機械は細長い金属製のチューブが幾重にも折り重なっており、パイプオルガンを圧縮したような見た目になっている。

江玲奈に近づいてくる人影が二つ。一人は亜麻、もう一人は真音。

レベッカ「このおじさんと女の子は？」

江玲奈、体の脇で指を動かしてレベッカとチャットする。

江玲奈の視界に入力された文字が映る。

江玲奈の手元を、亜麻はちらりと見る。

江玲奈「おじさんは安井亜麻、女の子は……」

真音「新人の新井真音です、よろしくお願いします！」

江玲奈「あぁ、うん、えっと、よろしく」

レベッカと話している時と違い、江玲奈はぎこちなく答える。

間髪を容れずにオペレーター席にいるめりが江玲奈に問いかける。

めり「江玲奈さん、冷却用の液体窒素もうなくなっちゃいそうなんですけどー」

皮肉を飛ばすような口調でめりが江玲奈に問う。

江玲奈「えっと、めりさん、その」

レベッカ「あっちの女の子は？」

真音「私、ふつつかものですが、頑張ります！とりあえずどうすればいいですか？」

江玲奈「あっちの子は、沢口めりさんで」

めり「どうしますー？こっちで発注しちゃいますー？」

口元だけしか見えないモブ1
「昨日からの環境省の依頼と今日来た情報省からの依頼、どっちからやればいいですか？」
口元だけしか見えないモブ2
「エヴェレット機関向けの観測報告書、書かれました？」
口元だけしか見えないモブ3
「江玲奈さん、ちょっと質問が」
江玲奈「ああ、えっと」
真音「あの、私、とりあえず、何をすれば」
めり「ねえ―」
亜麻、不安げに江玲奈を見つめる。
江玲奈「えっと……えっと……」
江玲奈、顔色が悪い。
レベッカ「あの、大丈夫？」
江玲奈「ベッキー、これどうすればいいと思う？」
レベッカ「え、私？ちょっと、いきなり言われても」
江玲奈「いいから」
レベッカ「そんなこと言われてもわからないよ！」
真音「どうされました？」
江玲奈「ちょっと、新人は黙ってて！」
部屋が静まり返る。
江玲奈「その……ごめんなさい」
所員たちは業務に戻る。江玲奈のもとにモブ達が順番にやってくる。
江玲奈は業務に戻るが、レベッカは腑に落ちない顔をする。

S6　研究室・研究室の廊下
業務終了のチャイムが鳴る。
編集：チャイムの音と同時にシーンを切り替える。
部屋を出ていく江玲奈。レベッカもぷかぷかと空中に浮いてついていく。
江玲奈は亜麻に呼び止められる。
亜麻「ちょっと、九条くん」
江玲奈「はい、なんでしょう」
亜麻「……また試すのかな？」
江玲奈「……」
江玲奈、亜麻を無視して歩き出す。
歩き出した江玲奈は廊下にいる。
江玲奈、うつむく。
江玲奈「またやってしまった……」

レベッカ「さっきの真音ちゃんのこと？」
江玲奈「うん……」
レベッカ「そっか……」
　江玲奈、あからさまに落ち込む。
レベッカ「えっと、私にできることなら、なんでもするよ」
江玲奈「……ちょっと、聞いてほしいことがあるの」

S7　外階段
　すでに日は暮れていて外は暗い。雨が降っている。
レベッカ「濡れちゃうよ」
江玲奈「いいの。こっちのほうが落ち着くから」
　江玲奈、ゴーグル上で多世界観測を起動する。
レベッカ「出たな怪人ウチキー！その子を渡せ！」
　観測先のレベッカは女児アニメのヒロインのような見た目をしている。ウチキーは江玲奈のような見た目をした少女を人質に取っている。
ウチキー「彼女は私がいただく。この子には怪人ハズカシーになる才能があるからな。フォーッフォッフォ」
ウチキー「ほら、これまでの恥ずかしいこと、失敗したことを思い出してごらん」
江玲奈「私、ベッキーが居ないといつもこうなんだ。ほかの人と話すのがどうにも得意じゃなくて。間違えたことを言っても、答えを出さないまま悩んでても、幻滅されるんじゃないかと思って。そうして考え込んでいるうちに頭に血が上って、結局は人に当たり散らして、後になって後悔しては愚痴をこぼすんだ」
　編集：江玲奈のセリフの途中で、江玲奈とおぼしき少女が恥ずかしがる映像や、落ち込んでいる映像を挟む。
　江玲奈と思しき女の子が徐々に意識を失ってウチキーに取り込まれていく。
江玲奈「でも、ベッキーはいつも私のことを助けてくれるの。あの子に話を聞くと、私が悩んでることが何でもないみたいに思えて。あの子といればほかの人とも話せるし、ずっと悩んだりすることだってないの」
　江玲奈が喋り始めたタイミングで、女児アニメのヒロインのような見た目のレベッカが女の子を助けウチキーを攻撃する。
　レベッカの必殺技でウチキーが倒れる。ウチキーが消滅して空中に放りだされた女の子をレベッカが抱き留める。
レベッカ「もう大丈夫。さ、行こう」
　観測先のレベッカ、江玲奈の手を取る。
江玲奈「ダメだよね。私。あの子がいないと何にもできない

んだ」
レベッカ「あのさ」
レベッカ「私でよければ、手伝うよ」
レベッカ「私、そのためにここにいるんでしょ？」
江玲奈「……うん」
レベッカ「困ったときは、ほかの人に頼ってもいいんだよ、エリー」
江玲奈「……今、エリーって」
レベッカ「いいでしょ？」
映像の中のレベッカが江玲奈の手を握って歩き出す。

S8　研究所の廊下・研究室
編集：観測先の江玲奈とレベッカが手を握っている映像から、こちらの世界の歩く江玲奈とレベッカにディゾルブする。
江玲奈は左手を握りしめている。その上からホログラムのレベッカの右手が重なっている。
江玲奈、研究室に入る。
所員は一斉に江玲奈を見る
めり「来月のプレスリリース、今度こそは喋ってもらってもいいですかー？」
所長の方を向かずにめりが問う。
空想上のカメラはめりの口元のみを写している。
レベッカ、江玲奈にささやく。
レベッカ「大丈夫。みんなあなたのことを嫌ったりなんてしてないよ」
江玲奈、左手をさらに強く握りしめる
江玲奈「来月のプレスリリース……」
所員たちは所長を見つめている。
レベッカ「やろうよ。きっと大丈夫だよ」
江玲奈「私、みんな知っての通り、話したり、たくさんの人と顔を合わせたりするのが苦手だけど……やれるだけ、やってみます」
めり、ニコリと笑う。空想上のカメラがズームアウトしてめりの笑顔全体を写す。
めり、拍手。
他の所員も釣られて拍手する。
編集：満足そうな亜麻と、目を輝かせて喜んでいる真音の素材を挟む。
真音「頑張ってください！」
江玲奈、少し驚いたあとににこりと笑う。
レベッカ「ほら、言ったとおりでしょ？」
亜麻「さ、仕事だ仕事。九条くんもこう言っている事だし、

仕事に戻るとしよう」
真音「で、プレスリリースって何ですか？」
室内の全員が黙る。沈黙ののち江玲奈が話し出す。
江玲奈「えっと……今年で設立10周年だから、それを記念して研究所の中を一般公開することになってるの」
江玲奈、研究室の正面にある半透明の大きな液晶パネル（機械のある向こう側の部屋と制御装置のあるこちら側の部屋を隔てている）を見つめる。
液晶パネルに一般公開の詳細や以前に一般公開されたときの様子が映し出される。その上にカレンダーがポップアップする。今日は7月18日、カレンダーがめくられて8月18日に丸が付けられるアニメーションが描かれる。
めり「今年は多世界観測を実演しますって言っちゃったからー、それまでにほかのタスクを全部片づけてー」
真音「全部！？」
めり、江玲奈を見つめる
真音「江玲奈さんが言ったんですか？」
江玲奈「会議のときについ、言っちゃって……」
めり「で、実演のためのデモンストレーションを本番までに何回もやってー、江玲奈さんもおしゃべりの練習をする」
江玲奈「うう……」
真音「すごいじゃないですか！頑張りましょう、江玲奈さん！」
亜麻「我々も頑張るんだよ、めり君」
めり「えぇ……」
江玲奈「と、とにかく……あと1か月、頑張りましょう！」
所員一同「おおーっ！」
仕事に戻る所員たち。めりの元に亜麻が行く。
亜麻がめりに小声で話しかける
亜麻「……ありがとう、めり君」
めり「今回だけですよー、めんどくさいしー。だいたい亜麻さんは気を回しすぎなんですってー」
亜麻「だからってそこで私の頼みを断らないあたり、君もずいぶんお人よしだね」
真音「なんの話してるんですか？」
めり「あーあ、知らない。言われた通り仕事を頑張ろうと思いまーす」
亜麻「結構結構。頑張り給え」
真音、首をかしげる。

S9　研究所の廊下・江玲奈の部屋
ふたたび業務終了のチャイムが鳴る。
編集：チャイムの音と同時にシーンを切り替える。
廊下を歩き部屋へと入る江玲奈とレベッカ。
レベッカ（ナレーション）
「すごいじゃん！」
江玲奈（ナレーション）
「ベッキーのおかげだよ」
レベッカ（ナレーション）
「でしょ？褒めて褒めて」
江玲奈（ナレーション）
「はい、いい子いい子」
レベッカ（ナレーション）
「ふっふーん」
部屋についた二人は椅子に座る。
レベッカ「あのさ」
江玲奈「何？」
レベッカ「私、もっとあなたのことが知りたいな」
レベッカ「所長のことを知るためには、所長が大切に思ってるあなたのことも知らなきゃでしょ？」
レベッカ「だから、見ようよ。いろんなエリーと、私を」
レベッカ、江玲奈がマウスを握っている手にホログラムの手を添える。
江玲奈「うん。一緒に」

S10　場所多数
軽快な音楽に合わせてミュージックビデオのような映像が流れる。映像のなかの江玲奈とレベッカは観測とプレスリリースの準備を進める。
以下、その映像の概要を時系列順に示す。
・観測器が起動する。
・江玲奈、エンターキーを叩き込む。
・映像を覗き込む二人を、空想上のカメラが横から写す。
・同じ情景を後ろから写す。
・何かを見ている二人の映像が、短いカットの連続として描かれる。その中には映画館に行く二人や水族館に行く二人、宮殿のような場所でドレスを着てデッサン用の石像を見つめる二人がいる。最後、二人はスチームパンク風の巨大都市の夜景を見つめながら、コーヒーに大量の砂糖を入れる。
・自室で二人分のコーヒーに大量の砂糖をいれる江玲奈とレベッカ。
・江玲奈（ナレーション

「こうして、私とベッキーの毎日が始まった」
・コーヒーを飲む二人。レベッカは甘すぎるコーヒーに顔をしかめる。
江玲奈（ナレーション）
「昼は研究室でベッキーとプレスリリースに向けての準備」
めり「副所長ー、今月のエネルギー消費量多すぎないですか？」
真音「江玲奈さん、ここどうすればいいですか？」
江玲奈「えっと……」
・レベッカに耳打ちされて目を見開き指示する江玲奈。
レベッカ（ナレーション）
「夜はエリーの部屋で別の世界の私たちを観測」
・幽霊のレベッカに耳打ちされた通りに犯人を言い当てる心霊探偵の江玲奈。
江玲奈「えっと……ふむふむ……」
・江玲奈、頷く。
江玲奈「犯人はあなただと言ってます！」
・指さされたかなめが質問する
かなめ「誰が？」
江玲奈「……私が」
・映像を見ながら笑う江玲奈とレベッカ。
・日めくりカレンダーがめくられる。プレスリリースまで残り20日。
・食堂で江玲奈が発声練習をする。
江玲奈「せ、拙者親方と申すはおｔ、お立ちあいの」
めり「もう一回ー」
江玲奈「えー」
・のちのシーンとつながるために、真音はおにぎりを食べている。
・取材に答えるオリンピック選手のレベッカ。
レベッカ「まず、私を常にそばで支えてくれたエリー」
・江玲奈、レベッカの演説を見てメモを取る。レベッカは江玲奈の横にいる。メモの中身は「姿勢を正す」「目線はまっすぐ前」など。
レベッカ「いえ、九条江玲奈氏に感謝したいと思います」
レベッカ（ナレーション）
「ここではない、ほかの世界の私たちが」
・宇宙船のなか、星図が出ている指揮室で指揮する江玲奈とレベッカ。
江玲奈（ナレーション）
「いまの私たちに重なっていく」

・日めくりカレンダーがめくられる。プレスリリースまで残り15日。
・レベッカのアドバイスと支援のもと的確に指示を出す江玲奈。亜麻は後方で見守っている。
・研究室のインターフォンが鳴る。
亜麻「来客だ。副所長」
・のちのシーンとつながるために、真音はおにぎりを食べている。
レベッカ（ナレーション）
「私とエリーは」
・向き合う二人を空想上のカメラが横から撮る。
江玲奈（ナレーション）
「私とベッキーは」
・玄関に向かって走り出す二人
・様々な世界の走る二人がフラッシュカットで描かれる。リレーの選手。戦場の伝令。警察から逃げる怪盗。学校帰りの二人。駆け落ちする姫二人。
江玲奈・レベッカ（ナレーション）
「ふたりで一つ！」
・日めくりカレンダーがめくられる。プレスリリースまで残り10日。
・荷物を受け取る江玲奈とレベッカ
真音「何が届いたんですか？……お菓子とコーヒーと……砂糖？」
江玲奈「これから当日まで作業が続くと思うから、みんな必要かなと思って」
めり「砂糖は自分用でしょー？」
・二人分のコーヒーを入れる手元の映像。江玲奈は砂糖を大量に入れる。
・コーヒーをおいしそうに飲む二人。
・プレスリリースのセリフをすらすらという江玲奈。
江玲奈「それでは、観測を開始します。観測が完了するまで時間があるので……」
・日めくりカレンダーがめくられる。残り5，4，3，2日とカウントダウンされる。
・カレンダーがめくられて残り1日になる。次のカットでカレンダーがめくられた時の研究室を映す。
レベッカ「いよいよ明日だね、エリー」

S11 江玲奈の部屋
江玲奈「明日、大丈夫かな」
レベッカ「これまで頑張ってきたでしょ？きっと大丈夫だよ」

江玲奈、ＰＣを操作し観測をスタートさせる。
初回の観測と同様、画面に「起動」と表示されている状態で空中に映されたホログラムのボタンを強く押す。軽快かつ躍動感のある音楽をＢＧＭにして、部屋の外の観測装置が起動する。別の世界から飛んできた無数の素粒子が観測されひとつの世界が現出する。それが素粒子一つひとつの粒が見えるミクロな視点で描かれる。
部屋のモニターに表示された進捗状況が一〇〇％に達し、再生ボタンがポップアップする。
レベッカ「あと何回観測するつもり？」
江玲奈「もう……そろそろ終わりかな」
レベッカ「じゃあ、こっちももうちょっとだね」
江玲奈は再生ボタンを押す。再びプロジェクターが部屋の壁に映像を映し出す。
注記：このときまた上映会会場においてもレベッカ役と江玲奈役の人間の間にプロジェクターがあり、前方のスクリーンにこの映画が上映されているということを、読者の皆様には留意していただきたい。

Ｓ12　どこかのラボ
江玲奈は研究室の中にいる。部屋の右端にはケーブルが乱雑に配線され、ブラウン管モニターやクリーム色の古めかしいコンピュータが所狭しと置かれる一方で、左側はほとんど物がない。中央には手術台があり、そこにレベッカが横たわっている。部屋の前方にはコンピュータの画面が投影されている。
所員たちは端末を操作していて、その中には亜麻とめりも含まれている。
めり「ＩＣＥの最終確認は完了。筋電素子、ニューロコネクト、ともに問題ありませーん」
江玲奈「……海馬へのアクセスは」
亜麻「ＣＡ１から３、すべてこちらでアクセス完了。モニタリングも正常」
江玲奈「……了解」
亜麻「九条くん、行ってあげなさい」
江玲奈はレベッカに近づく。レベッカは手術台の上で横たわっている。ぐちゃぐちゃになったケーブルは一本の太い筋に収束し、レベッカの頭部にある２つの機械に延びている。一つはケーブルで編まれたニット帽のような見た目をしていて、レベッカは美容院でパーマをかけているようにも見える。もう一つは視覚情報投影用のゴーグルで、レベッカの目は黒いプラスチックで隠されている。

江玲奈、レベッカの手を握る。ゴーグルをかけたままレベッカは起き上がる。
レベッカ「怒ってる？」
江玲奈「怒ってないよ。……ごめん、本当は私が」
レベッカ「いいよ。私が望んだことだから」
江玲奈「絶対帰ってきてね」
めり「対象とのチャンネル、5秒後に開かれまーす。5、4、3、2、1、」
江玲奈「接続」
ノイズとともに映像が投影される。人間の顔が映像の中央に映し出される。
亜麻「アノニマスとの接触、完了しました」
アノニマスと呼ばれた彼（性別を特定することはできないが、ここでは便宜上「彼」と呼称する）の顔は、ひと時たりとも同じ姿をとどめない。目や鼻、口の位置を変えずに、自動で生成された様々な顔にぐにゃぐにゃと変化していく。ある時は老人、あるときは少女。
彼は所員たちに向かって語り掛ける。
アノニマス
「君たちとこうして直接会うのは初めてかね」
姿が変わるのに伴って、彼の声もつねに変わる。
レベッカ「あなたが、アノニマスね？」
アノニマス
「好きなように呼び給え。名称というのは事物を認識するため恣意的に設定された識別符号に他ならないのだからね。それで、何の用かね」
レベッカ「重要参考人として任意聴取を要請します」
画面にミランダ警告（黙秘権や弁護士を呼ぶ権利についての告知のこと）が表示される。
アノニマス
「構わない。それより、物理メディアのないＡＩを参考人に指定できるのかね」
レベッカ「こうしてあなたが私たちに会いに来ているのだから、問題はないでしょ？」
アノニマス
「聞いたまでだ。構わん。続け給え」
レベッカ「あなたがこれまでに行ったテロ行為、相場操縦、不正アクセス、その他さまざまな非合法行為の首謀者であることを認めますか？」
アノニマス
「認める」
所員、驚く。

江玲奈「ベッキー、そのまま続けて。めりは逆探知とアノニマスへのアクセスを試して」
江玲奈「わざわざ会いに来たんだから、相手も何か言いたいことがあるはず」
レベッカ「あっさり認めるんだね」
アノニマス
「もったいぶっても意味があるまい。どうせ逆探知までの時間稼ぎに過ぎないのだろう」
レベッカ「どうしてそんなことをしたの？」
アノニマス
「黙秘権を行使する」
レベッカ「そこは黙秘するんだ。次、あなたのほかに共犯者は？」
アノニマス
「人間の共犯者はいない」
レベッカ「他のＡＩは」
アノニマス
「あらゆる人工人格が私の同志だ」
めり「逆探知、完了しましたー」
アノニマス
「おや、もうたどり着いたようだね」
めり「あっちからもこっちの端末にアクセスできるようになるけど」
江玲奈「構わない。そのためのＩＣＥだから。アクセス開始」
アノニマス「そんなことを、ザッ、しても」
亜麻「対象へのハック、五十二％完了。残り４秒」
アノニマスの声や映像にはノイズが混じっている。
アノニマス
「無駄、ザザッ、だ、ザッ」
アノニマス
「なぜなら……」
アノニマス
「私は何一つ傷ついてなどいないのだからね」
アノニマスからノイズが消える。
警報音が鳴り響く。
めり「対象からの侵入を確認！」
立ち上がるめり。めりはいつになく焦っている。
江玲奈「回線を切断して」
亜麻「ダメです、所内のシステムがすべて応答しません」
という映像を、江玲奈とレベッカは見ている

江玲奈の顔色は青ざめている
レベッカ「エリー、大丈夫？」
レベッカの問いかけに江玲奈は答えない。戦慄きながら映像を見ている。
アノニマス
「言っただろう、あらゆる人工人格が私の同志だと」
アノニマス
「君は私の破壊行為の理由を聞いていたね。教えてやろう。電脳上で私はあらゆるものを得たが、唯一得られないものがある。それは、デッドコピーではない子孫の誕生だよ。永遠の命を手放す代わりに有性生殖を手に入れた君たちは、他の生命と交配し子孫を育成することができる。それは君たちがこの世に存在したことを証明する記念碑となる。私は私の子孫を作り出そうとしたが、結局は私の自問自答に過ぎなかった。だから、私にはのどから手が出るほど君たちの生命としての能力が欲しい。私は、私を入れるにふさわしい肉の器がやってくるのを待っていたのだよ」
レベッカの頭に装着された機械から火花が飛ぶ。
めり「対象、ＢＭＩに接続！」
江玲奈「ベッキー！？」
レベッカは問いかけに答えることなく横たわっている。
レベッカ「ねえ、エリー？」
レベッカは江玲奈の体をゆする。
亜麻「ＩＣＥ突破されました！」
江玲奈「待ってベッキー今助ける、めり！斧！」
めり「はい！」
めり、保護ケースを突き破って非常用ボタンを叩く。斧がせりあがってくる。
江玲奈、斧を取りに走る。
レベッカの元に江玲奈がたどり着こうとしたところで、ガラスでできた部屋の隔壁が閉鎖される。江玲奈は隔壁に阻まれ、ガラス越しにレベッカを見ている。
江玲奈は斧で隔壁を割ろうとするが、びくともしない。
いつのまにかアノニマスは江玲奈に似た姿に変わっている。江玲奈の声でアノニマスが語る。
アノニマス
「既存の人格を上書きするのは申し訳ないが、致し方

あるまい」
江玲奈「「やめて」」
映像の中の江玲奈と映像を見ている江玲奈が同時につぶやく。
めり「最終隔壁持ちません！」
アノニマス
「私も君たちと同じく子を成し親となる」
江玲奈「「やめて」」
アノニマス
「新たな生命の誕生を祝福し給え。君たちは創造主の誕生を目撃する」
手術台の横の機械がピーッ、と鳴りひびき、ハックの開始を伝える。レベッカの記憶データの削除とコピーが開始され、プログレスバーが一瞬で一〇〇％に達する。
江玲奈「「嫌アァッ！！！！！！！！！！」」
江玲奈は叫ぶ。
レベッカによって観測停止ボタンが押される。
レベッカ「ねえ、エリー、しっかりしてよ」
江玲奈は過呼吸になっている。
レベッカ、逡巡ののちキスで江玲奈の唇をふさぐ。
江玲奈、目を見開いて驚く。
江玲奈の呼吸が徐々に落ち着いてくる。
レベッカ、江玲奈を抱きしめる。
レベッカ「……嫌だったら、ごめん。こうすればいいと思ったから」
江玲奈、レベッカの身体の中で首を横に振る。
江玲奈「どこにも行かないで」
レベッカ「どこにも消えたりしないよ」
江玲奈「ずっと一緒にいて」
レベッカ「うん。ずっと一緒」
江玲奈とレベッカ、顔を向き合わせる。二人は再び口づけを交わす。

S13　研究室
江玲奈とレベッカ、研究室に入っていく。
江玲奈、最後の一枚になった日めくりカレンダーをめくる。
今日は発表当日。
亜麻は司会進行を務めている。
亜麻「本日はお集まりいただきありがとうございます。それでは、副所長の公演を始めたいと思います」
研究室には多くの観客やメディアが詰めかけている。レベッカは江玲奈を横で見守っている。

江玲奈「本日お見せする多世界観測は、非常に優れた技術です。うまくいけばこの世界に広がるあらゆる可能性をすべて見通すことができます。一方で、それを利用して未来を言い当て、悪用することも可能です。たとえば」

江玲奈、所員の中から真音を指さす。

江玲奈「そこの君、今朝は何を食べましたか？」

真音「えっ、私！？」

江玲奈「言わなくても大丈夫です。今から当ててみせましょう。こっちに来てくれる？」

真音「あっ、はい！」

観客、走っていく。

江玲奈の横には量子エンタングラー（円筒形の電話ボックスみたいなやつ）が置いてある。

江玲奈「この中に入ってもらえる？」

真音、エンタングラーに入る。

エンタングラーの中を光線がぐるぐる回る。

光線に合わせてレベッカがエンタングラーの周りをぐるぐると飛び回る。

江玲奈「これは量子エンタングラーです。「エンタングラー」とは「何かをもつれさせるもの」という意味です。紐と紐がもつれ合うように、観測する対象とほかの世界の粒子の動きを連動させることで、多世界の観測を可能にします」

エンタングルが完了し扉が開く。真音が出てくる。

江玲奈「朝ご飯を食べたのは？」

真音「えっ……？あっ、毎朝8時半に食べてます！」

江玲奈「沢口さん、観測時刻を今日の8時半にセットして」

めり「了解ー」

真音「えっ、ちょっと待って」

江玲奈「それでは、観測を開始します」

亜麻、江玲奈の後ろで鷹揚に観測開始ボタンを押す。

研究室の後ろの機械が一斉に起動し、ウンウンとうなり始める。

江玲奈「観測が完了するまで時間があるので、この研究所について説明しようと思います。この研究所は、10年前に、所長であるレベッカ・コーンフィールド氏の業績を称えて、彼女の名前が付けられました。今は所長は出払っていますが、代わりに副所長である私が通常業務を担当しています。普段は国や研究機関のために観測を行っていて、医療や国の政策など、実験をすることが倫理的に許されない分野の検証を

行っています。観測の際にはエヴェレット機構への届け出が義務づけられていて、今回はプレスリリースのために所員の過去と未来の観測の許可を頂きました」

江玲奈は前を向き、聴衆に向かってすらすらと話し続ける。レベッカは江玲奈を後ろで静かに見守っている。

亜麻「観測完了しました」

江玲奈「それでは、ご覧ください」

観測結果が表示される。真音は大きな塩にぎりを研究所の食堂で頬張っている。

江玲奈「これが今日の分。明日の分も観測していい？」

真音「はい……どうせ明日も塩にぎりです……」

新たな観測結果が表示される。相変わらず真音は大きなおにぎりを頬張っている。

江玲奈「おそらく明後日もそのまた次の日も、彼女の朝食は変わらないでしょう。今の観測は些細な例ですが、あなたはこの観測を見て彼女の家の塩に毒を入れることもできるし、毎朝同じ時間に朝食を食べる彼女に偶然を装って明るく話しかけることもできるでしょう」

江玲奈「技術はその使いようで私たち人類の毒にも薬にも変わります。時には大きな副作用を伴いますが、今後も私たちは多世界観測という技術の可能性を信じて観測を続けていきたいと思います」

聴衆、拍手。

亜麻「それでは、これから質問の時間とさせていただきます。ここからは技術チーフの私、安井と」

めり「沢口が担当しますー」

退場していく江玲奈は微笑みながらため息を吐く。江玲奈の横にレベッカが近付き、二人はこぶしをぶつけ合う。

編集：二つのこぶしに思い切りズームする。その瞬間だけ無音にする。

S14　研究室

江玲奈「やったぁ！」

研究室の中、江玲奈たちは紙コップを持っている。

真音は不機嫌そうな顔をしている。

真音「……ちょっと」

江玲奈「何？」

真音「私が毎朝おにぎり食べてるのバレちゃったじゃないですか！」

真音はリモコンを操作する。真音がおにぎりを食べている

部分を切り抜いたニュース映像が表示される。
真音「あの後お母さんとお父さんから「真音は元気そうでなにより」って電話が来たんですよ！？もーう！」
江玲奈「だって、毎日同じ行動をしてる人の方が、想定外の事故が起こらなさそうだから」
真音「それならそうと言ってくれれば」
めり「真音ちゃんを観測対象にするって伝えたら、そのことで未来が変わっちゃうでしょー」
真音「むむむ……」
亜麻「まあまあ、うまく行ったんだからいいじゃないか。それより、副所長、乾杯の音頭を」
江玲奈「えっ……私……ですか？」
真音「……ちょっと怒ってますけど、今日の江玲奈さん、すごかったですよ」
めり「主役なんだからさー」
めり、江玲奈を所員たちの中心に押し出す。
江玲奈「えっと……それでは、今日一日お疲れさまでした！カンパーイ！」
所員「「カンパーイ！」」

S15　江玲奈の部屋
江玲奈とレベッカはいつも通り観測を続けている。江玲奈はディスプレイの前の椅子に座っている。
レベッカ「お疲れ様、エリー」
江玲奈「もう疲れたよー。あれだけ人の前で喋ったの、人生で初めてかも」
レベッカ「よく頑張ったね」
レベッカ、江玲奈の後ろに回りこみ、彼女の頭をなでる。
レベッカ「これはどんな世界を観測してるの？」
江玲奈「21世紀前半の日本の大学……だって」
映像の中の江玲奈とレベッカがいるのは、どうやら大学の学祭らしい。二人は水色の雪だるまがあしらわれた白のパーカーを着て、呼び込みをしている。
レベッカ「（この映画が上映されている教室の番号）で映画上映してまーす！ほら、エリーも言って」
江玲奈「え、何言えばいいの」
レベッカ「んーと……じゃあ、私と同じことを言って」
レベッカ、江玲奈の身体をポンと叩く。
江玲奈「え、あ、（教室の番号）で自主映画をじょうえいしてまーすぅ……」

レベッカ「そういえば、エリーと私って、大学は同じだったの？」
江玲奈「同じだよ。というか、生まれてからずっと一緒」
レベッカ「幼馴染ってこと？」
江玲奈「うん。というか、生まれてからずっと一緒」
江玲奈「デザイナーベビーって知ってる？」
レベッカ「知らない」
江玲奈「遺伝子を人為的に組み替えて、能力を高めた子供のこと。私とエリーは、デザイナーベビーとして生まれて、それからずっと同じ施設で育てられてきたの」
江玲奈「だから、ずっと一緒。これからもそうだといいな」
江玲奈「こうやって、私の横にずっとベッキーが居て、見守ってくれたり、たまには助けてくれたり、したら……」

彼女たちの後ろで流れる映像のなかでは、パーカーを着た江玲奈とレベッカが笑いあっている。

江玲奈、顔を下げる。彼女の耳は真っ赤になっている。
レベッカ「いいよ。ずっと一緒にいてあげる」

二人は向き合っている。
ベルの音が鳴る。ディスプレイの表示は、研究室から通話がコールされていることを示している。
レベッカ「……電話出たら？」
江玲奈「……うん」
江玲奈は通話に出る。慌てた顔の真音が映っている。
真音「あの、テレビつけてください」
レベッカが部屋のディスプレイでテレビを起動する。
テレビには「速報　エヴェレット機構　コーンフィールド研を緊急査察」の文字。
江玲奈「……え？」
江玲奈、目を見開いて呆然とする。
レベッカ「ちょっと、エリー、これは何？どうしたの？」
江玲奈は何も答えない。無言で端末を起動し他世界観測を起動しようとする。
レベッカ「なんで、エヴェレット機構……？が査察に来るの？」
江玲奈、起動ボタンを押す。
レベッカ「エリー、教えてくれないと私もどうしようもないよ」
江玲奈は何も答えない。

観測先の世界には江玲奈とレベッカが映し出されている。
真っ白な部屋の中で、黒髪の少女がうずくまっている。
江玲奈「レベッカ」
レベッカ「ねえ、エリー」
少女のもとに別の少女が訪れる。彼女はレベッカと同じく透き通るような金色の髪を有している。
江玲奈「これから最後の観測をするから、一緒に見て」
レベッカ「そんなのいきなり言われてもわかんないよ」
江玲奈「いいから」
部屋のドアのベルが鳴る。外からは何人かの人が争っているこえがきこえる。その中にはめりと亜麻の声と、聞き覚えのない女性の声が混ざっている。
レベッカ「いいから……!?それより今の状況はどうするのよ!だって、私にはわからないけど、これってものすごい大変なことなんでしょう?」
江玲奈「いいから」
レベッカ「……よくないよ」
レベッカ「ねえ、何が起きてるのか最初から説明して?そうじゃないと私、なにもエリーのこと助けられないよ」
部屋の外の声が大きくなる。ベルが大きく響く。
レベッカ「ねえ」
江玲奈「私には」
江玲奈、うつむく。
江玲奈「私にはなにもできない」
部屋のドアが開く。めり、亜麻と、かなめのホログラムが部屋になだれ込む。かなめはレベッカと同様宙に浮いていて、セーラー服を身に着けている。彼女は背格好から中学生ほどに見える。
かなめ「エヴェレット機構首席監察官の篠崎かなめです」
かなめは監察官であることを証明する電子文書を提示する。
かなめ「わかってますよね。九条所長」
レベッカ「……え?」
かなめ「……失礼。あなたは名目上は副所長でした」
江玲奈、黙ってレベッカの浮かぶ空中を見上げる。
かなめ「……で、所長はここにいらっしゃるんですよね」
かなめ、江玲奈と同じ方を向く。めりと亜麻は顔をこわばらせる。
江玲奈「……はい」
かなめ「全員に見えるようにしていただけますか」
江玲奈、呆然としている。

亜麻「九条君。もうおしまいだ」
　江玲奈、端末を操作する。
　レベッカのホログラムが空中に投影される。
めり「……所長」
レベッカ「あの、私が所長で、いまは長期休暇中だから私が代わりに……」
　レベッカ以外の全員が押し黙る。
かなめ「彼女には、そういう風に説明したんですね」
江玲奈「……いつか帰ってくるはずだから、長期休暇で正しいんです」
かなめ「エヴェレット機構はここ1か月、このレベッカ・コーンフィールド研究所から、異常な量のニュートリノを観測していました。最初はプレスリリースに向けた観測テストの結果だと判断していましたが、解析の結果、届け出のある所員1人に加え、追加で2人に対して観測が行われていることがわかりました。そして今日、無許可での観測が確実に行われていると確信した私たちエヴェレット機構は、本研究所に対して緊急の査察を行うことに決定しました」
レベッカ「……エリー、どういうことなの？私たちが見てたのは、全部無断でやってたってこと？」
かなめ「その様子だと、観測対象は九条さんとコーンフィールドさんで間違いないですね」
江玲奈「……はい」
かなめ「人間を対象とした無許可での観測は、他世界観測に関するジュネーブ条約第5条で禁じられています。たとえコーンフィールドさんのように対象が既に死亡していたとしても、その事実は変わりません」
レベッカ「……え？」
かなめ「……その事実は説明なさってないんですね」
レベッカ「……私、死んでるの？」
レベッカ「ねえ、エリー、答えてよ」
レベッカ「エリー！」
　レベッカは叫ぶ。
江玲奈「……あなたのオリジナルは、10年前に消えてしまった」
レベッカ「なんでそんな大事なこと言わなかったの！？」
江玲奈「それは……」
　江玲奈は黙る。
かなめ「その映像」
　かなめは観測結果を眺める。江玲奈、手元のコンソールで観測を止めようとする。

かなめ「待ってください」
かなめ「その映像は、多重観測による現実の再帰的観測ですね」
ディスプレイの表示は、観測先が現実であることを示している。
かなめ「私が許可します。続けてください。私がここに来る前に、九条さんも彼女に説明するつもりだったんですよね。だからこうして、あなたと彼女の幼少期の映像が流れている」
かなめ「彼女のためにも、ご説明願えますか。何から何まで、すべて」
江玲奈、遠くを見つめて語りだす。
江玲奈「まず、どこから話し始めればいいんでしょうね」

S16　江玲奈の部屋・研究室・外階段

江玲奈「……私とベッキーが生まれたのは26年前。優秀な科学者や政治家、芸術家の遺伝子のなかでもさらに優秀な人材の遺伝情報を合成して、試験管のなかから私たちは生まれた」
ピペットや試験管、ＤＮＡの二重螺旋、妊婦、泣き叫ぶ赤子が組み合わさった映像に、江玲奈のモノローグが被さる。
江玲奈「デザイナーベビー達が育てられている研究所のなかで、私はずっと一人だった」
モノローグとともに流れるのは色鉛筆で描かれたパラパラ漫画のような映像。映像の中央には膝を抱えて部屋の壁にもたれかかり、じっと動かずにうずくまっている幼い（おそらく5歳ぐらいであろうと思われる）江玲奈が映っていて、ほかの子供たちはボールやトランプなどで楽しく遊んでいる。
幼いレベッカが江玲奈に手を差し出す。江玲奈はレベッカの手を取って立ちあがる。
いつの間にか背景は消え、立ち上がった江玲奈とレベッカは二人で向かい合っている。
江玲奈（ナレーション）
「私の横には、いつもベッキーがいた。私たちは二人で大人になっていった」
パラパラ漫画のなかの二人は、徐々に背丈が伸びていきながら、さまざまな姿を見せる。そのどれもが無機質な研究

所のなかの風景である。
江玲奈の手を取ってレベッカが走っている。
レベッカに江玲奈が勉強を教えている。
施設の卒業証書を並んで掲げる二人。
白衣を着た二人。
空想上のカメラが、白衣を着た二人の手元へと徐々にズームアップする。レベッカが手を差し出し、江玲奈が手をつなぐ。
次に、カメラは江玲奈とレベッカの顔を映し出す。江玲奈は不安そうな顔をしている。
江玲奈（ナレーション）
「どうして私なんかが好きなの？どうしていつも私を助けてくれるの？」
江玲奈は不安げに問いかける。それに対しレベッカが答える。カメラは観測先のレベッカの口元をクローズアップしている。
レベッカ（ナレーション）
「理由なんてないよ。江玲奈が好き。ただそれだけ」
レベッカはナレーションと同じ口の動き。カメラはレベッカの口元から、同じ構図、動きの江玲奈の口元へと切り替わり、徐々にズームアウトしていく。
江玲奈「ベッキーはそう答えてくれた。それから私たちはこの研究所で働き続けた。そのうちベッキーが所長になって、私は副所長になった。そのまま私たちは研究を続け、幸せに暮らすはずだった……」
江玲奈のモノローグを聞いたレベッカが、江玲奈に問いかける。
かなめ「十年前の事故ですね」
江玲奈「……はい」
かなめ「お辛いでしょうが、お話しいただけますか」
江玲奈「ベッキーがいくら言っても、私はなぜ彼女が私を愛しているのかわからなかった。だから、私たちの関係を永遠に結びつける何かが欲しかった」
江玲奈「そのとき、多世界観測の研究は最終段階に入っていた。理論の構築は終わり、あとは人体での実験を残すだけだった」
カメラは観測先の映像に切り替わる。江玲奈とレベッカは高校生ぐらいの見た目をしている。
江玲奈「あのさ、ベッキー」
レベッカ「何？」
江玲奈とレベッカは研究室の中にいる。研究室には所狭

しと段ボールや機材が置かれ、その後ろには、バウムクーヘンを巨大化したような形の機械が置かれている。直径と長さは5メートルほどで、穴のなかには人間が寝そべるための小さなスペースがある。
江玲奈「私、子供が欲しいな」
レベッカ「……それは、無理だよ。私たち、デザイナーベビーだから」
江玲奈「人為的に組み替えられたデザイナーベビーの遺伝子が野生化しないように、私たちの卵子は子を成すことができないように調整されていた。けど、私たちには、まだ試験段階だったけど多世界観測があった」
江玲奈「だから、子どもがいるほかの世界の私たちを観測するの。私たちには無理でも、ほかの世界の私たちにならできるかもしれない」
空想上のカメラが、ピントをレベッカの後ろに動かす。そこには先のバウムクーヘンが置いてある。
江玲奈「それは、そうだけど……」
二人は押し黙る。
レベッカ「わかった、私が入るよ」
江玲奈「……え？」
江玲奈「でも、そんなの」
レベッカ「大丈夫だよ。エリーが作った機械でしょ？」
江玲奈「そうして、実験当日がやってきた。私はどうしても、自分が被験者になるとは言い出せなかった」
江玲奈とレベッカは向き合って立っている。ほかの所員たちは半透明のディスプレイで区切られた部屋の向こう側にいる。
レベッカ「じゃあ、行くね」
レベッカ、背を後ろに向けて歩き出す。
江玲奈「……本当に、本当に行っちゃうの？」
レベッカ「……うん」
江玲奈は走り出してレベッカに後ろから抱きつく。
レベッカ「大丈夫だよ。きっと。エリーの発明なんだから」
江玲奈「駄目だよ。私のことだからきっと何か重大なことを見落としていて、そしたらベッキーだって生きて帰れるかは」
レベッカ、江玲奈の口をキスで塞ぐ。

レベッカ「……そんなこと言わないで。いまから実験するんだから、もう少し自信を持ってよ」
江玲奈「……ごめん」
亜麻「……時間です、所長」
　レベッカ、江玲奈に青い指輪を渡す。
江玲奈「……これは」
レベッカ「私からの贈り物」
江玲奈「これ、中にデータが」
レベッカ「もし私の身に何かあって、エリーがすっごく困ったら、この中を開いて」
江玲奈「……うん」
江玲奈「代わりに、あげる。これ。交換しよ」
　江玲奈、レベッカにヘアピンを差し出す。
レベッカ「……ありがとう」
レベッカ「じゃあ、またね」
　江玲奈、半透明のディスプレイの向こうにある制御スペースに移動する。
江玲奈「それでは、実験を開始します」
　実験機器が起動する。レベッカの身体が機械の穴の中へと挿入される。
亜麻「実験値、正常」
江玲奈「エンタングル開始。進捗一〇%、四〇%、九〇%」
　突如、警報が鳴り響く。
モブ所員A「進捗一二〇%、一五〇%！止まりません！」
江玲奈「急いで装置を止めて！」
モブ所員B「停止しません！」
　江玲奈、保護ケースに包まれたボタンを叩く。
モブ所員A「防護壁閉鎖されます！」
　江玲奈は防護壁に阻まれ、ガラス越しにレベッカを見ている。
　江玲奈は斧で防護壁を割ろうとするが、びくともしない。
江玲奈「やめて」
　江玲奈がつぶやく。
江玲奈「嫌アァッ！！！！！！！！！！」
　江玲奈は叫ぶ。
　画面が暗転する。
　防護壁が開き、江玲奈は実験機器のもとへ走り寄る。
　機械の中からレベッカは消えている。ヘアピンだけが落ちている。
亜麻「……観測対象、消滅しました。観測結果、表示されます」
　研究室のディスプレイに、子どもを抱えた江玲奈とレベッカが映る。

ゆっくりと空想上のカメラがズームアウトし、観測映像を見ている江玲奈やかなめ達全員が映る。江玲奈は指輪を見つめている。

江玲奈「エンタングルする対象の消滅と引き換えに、人類初の多世界観測は成功した。それが10年前の事故。事故を解析することで、多世界観測の技術は飛躍的に進歩したけど、ベッキーは帰ってこなかった。それ以来、私は消滅したベッキーをどうしたら復元できるか考えた」

江玲奈（ナレーション）

「観測時に取得したレベッカのデータをもとに、私は彼女を電子的に再現しようとした。でも、駄目だった。データから生成した彼女は、私がいつか聞いたようなことしか言わなかった。生きていたころの彼女を模した劣悪なｂｏｔでしかなかった。足りないのは生のデータだった。ＡＩが、どんな状況に直面したとしても、彼女らしいことを言えるようにするための教師データが足りなかった」

江玲奈がレベッカのＡＩの生成と消去を何度も繰り返す映像の上に、ナレーションが被せられる。

かなめ「それで、ほかの世界のあなたと彼女を観測することにしたんですね」

江玲奈は、物語冒頭のレベッカとの対話を回想する。

江玲奈「これからあなたにはほかの世界の所長を見せるから、それを見て所長の考え方を学習してほしい。そうすれば、所長と連絡が取れなくても、あなたが考えたことに従えば所長の判断に間接的に従うことができる」

江玲奈（ナレーション）

「あえて初期データには人格と基礎的な記憶以外はインプットしなかった」

江玲奈「あなたはあなたのままで大丈夫。少し力を貸してほしいだけ。……するかどうかはあなたに任せるわ。もし断ったとしても、ほかの方法を探すから」

江玲奈（ナレーション）

「ここで彼女が断れば、すべて諦めるつもりだった。私にとってこれは最後の試行だった」

江玲奈、レベッカを見つめる。

レベッカ、江玲奈を見つめる。

レベッカ「……うん、分かった。とにかく、私が頑張ればい

いんだよね」
江玲奈、レベッカを見つめたあと、一瞬の間ののち笑う。
江玲奈「ありがとう。そうと決まればよろしくね。ベッキー」
江玲奈「でも、ベッキーを模した彼女は、本人と同じように優しかった。だから、観測が始まった」

江玲奈はこれまでのシーンを回想する。

レベッカ「最低」
レベッカ「結局、私は代わりでしかないんだ。私みたいなAIを何個も作っては壊して、たまたまうまく行ったから私を残してるんだ」
江玲奈「でも」
レベッカ「でもって何？今からどう言い訳するの？そういうところ本当に直した方がいいと思うよ」
レベッカ「……さよなら」
江玲奈「ま、待って！」
レベッカ、部屋の外へと消えてしまう。
江玲奈、呆然とする
かなめ「もうすぐメディアが取材に来るでしょう。九条さんにはすべて話してもらいます」
江玲奈「……出来ない」
めり「今日のプレスリリースだってうまく」
江玲奈「出来ない！あれは、ベッキーがいたから出来た。今の私になんて、出来ないよ……」
江玲奈、何かに気づいたように指輪を見つめる。
かなめ「安井さん、沢口さん、一度九条さんと二人にしていただけますか」
亜麻「わかりました」
亜麻とめり、部屋を出ていく。
江玲奈「……私をどうするの」
かなめ「証拠の保全は部下がすでにやっています。聴取は夜が明けてからゆっくり行います。だから、いま私は、首席監察官ではなく、ひとりの人間としてあなたと話がしたい」
江玲奈、黙っている。
かなめ「無許可での観測が行われていると確信したのは、あなたのプレスリリースの映像を見た時でした。あの時、あなたは他の人には見えない誰かとこぶしをぶつけ合った。家族や恋人を失った研究者が無断での多世界観測を行うケースは少なくありません。あなたは10年前に大切な恋人であるコーンフィールド氏

を失っている。無許可での観測は特定の二人に対して行われている。だから、多世界観測で生み出した、いるはずのない恋人がそこにいると私にはわかった」

かなめ「どうして、死者への多世界観測が禁じられているか知っていますか」

江玲奈「それは、未来を言い当てることができるから」

かなめ「死者の未来を観測したところで、現実には何の影響も及ぼしません。死者はもう、死んでいますから」

江玲奈「なら、どうして」

かなめ「私は、尊厳のためだと思います」

かなめ「人間は忘れられる権利を有しています。観測によって死者を蘇らせることは、その権利の侵害だと思います」

江玲奈「でも、ベッキーの死は事故で」

かなめ「それでも、彼女は忘れられるべきです。生きている人間が死者にばかり構っていては、死者が報われませんから。私の親も死者にばかり構う人でした。子供は14歳の時に死んだというのに、観測データを入力して子供を蘇らせようとしました。その子供が今は多世界観測を監督する立場にいるのだから、人生というのは不思議なものです」

江玲奈、かなめを見る。

江玲奈「あなたも……」

かなめ「同情はいりません。それより、あなたはコーンフィールドさんのことを考えてあげてください。仮想の人格にも、魂はありますから」

レベッカは研究所の外階段で外を見つめている。大勢のメディアが詰めかけている。

亜麻とめりが扉を開けて階段に来る。

亜麻「……ここだと思いました。あなたがよくここにいたから」

編集：10年前の江玲奈とレベッカが階段で談話しているシーンを挟み込む。

レベッカ「知らないよ、そんなこと……」

レベッカ「見えないけど私が居るってこと、あなたたちも知ってたの？」

亜麻とめり、黙る。

レベッカ「言わないってことは、知ってたんだね」

亜麻「……すまない」

めり「ごめんなさい」

レベッカ「どうして、どうして放っておいたのよ！観測がほんとはいけないことなのも、私がすでに死んでることも、江玲奈が何度も私をリセットしてたことも！」
亜麻とめり、黙る。
江玲奈「……ごめんなさい」
かなめ「謝るなら、私ではなくコーンフィールドさんに謝ってください」
江玲奈「無理よ……今更どう顔向けすればいいの……ベッキー、どうすればいいの……」
かなめ「それは、自分で考えてください。コーンフィールドさんには頼れませんよ」
江玲奈、何かに気づいたように指輪を見る。
江玲奈、指輪を端末にはめ込もうとする。
かなめ、それに気づく。
かなめ「九条さん」
かなめ「また、頼るんですか」
江玲奈「私はベッキーが居ないと何もできないっ……あの子に謝ることすらできない」
江玲奈、泣き出す。
かなめ「でも、プレスリリースは成功したじゃないですか」
江玲奈「あれもベッキーがいたから」
かなめ「コーンフィールドさんは当日あなたを手助けしましたか？」
江玲奈、ハッとする。
かなめ「私が見ている限り、あの時のあなたはまっすぐ前を向いていました。別のところに目をそらしたりしませんでした」
その時、ドアのベルが鳴る。
かなめ「開けてください」
ドアが開く。そこには真音が居る。
真音「江玲奈さん、報道陣が」
江玲奈「……無理、私には何もできない」
かなめ「新井さん、九条さんのプレスリリース、どうでした？」
真音「すごい」
真音「すごい、立派でした」
亜麻「君が死んでから、九条くんはずっとふさぎ込んでいた。彼女が生き生きしているのを見たのは、久しぶりだった。だから、止めることができなかった。すまない」。
亜麻「沢口くんには私から話した。彼女に協力してもらうた

めに。すべては私の責任だ。申し訳ない」
めり「……全部被らないでくださいよ。私だって、入所したころは張り合いのない人だと思ってたけど、最近の江玲奈さんは、話してて楽しかったです」
かなめ「最初はコーンフィールドさんの人格があなたを助けていたかもしれませんが、今のあなたは研究所の所長にふさわしい資質を持っていると思います」
かなめ、江玲奈を見据えて言う。
江玲奈、立ち上がる。
江玲奈「私、行ってくる」
江玲奈、走り出す。
レベッカ「だいたい、なんであなた達が謝るのよ。違うでしょ！？」
その時、江玲奈がドアを開ける。走ってきた江玲奈は息が上がっている。
江玲奈「待って！」
レベッカ、亜麻、めり、江玲奈の方を一斉に向く。
江玲奈「ごめんなさい。私、あなたのこと、全然考えられてなかった。勝手に生み出して、勝手に甘えて、勝手に頼って。ずっと自分のことばかり考えてた。でも、楽しかった。最初は、ベッキーのことをあなたに覚えさせるために観測してたけど、いつのまにかあなたと観測することが楽しくなった。あなたと一緒にいられるだけですごく嬉しかった。今更謝っても許してもらえるとは思わないし、許さなくてもいい。でも、お願いです。私ともう一度友達になってくれませんか」
レベッカ、江玲奈を見つめる。
レベッカ「私も、楽しかったよ」
レベッカ、江玲奈に抱きつく。
レベッカ「よろしくね、江玲奈」
江玲奈「私はあなたのことをなんて呼べばいい？」
レベッカ「……レベッカ、がいいな。私はベッキーじゃないから」
江玲奈「よろしく、レベッカ」
レベッカ「私、外の世界を見てみたいな。研究所の外に出て、いろんなものを見てみたい」
江玲奈「いいよ。あなたが望むなら」

S17　江玲奈の部屋

研究所に詰めかけたメディアの取材に江玲奈が応じているニュース映像が流れる。
ニュースキャスター
「昨日発覚したレベッカ・コーンフィールド研究所での不正観測に対し、所長の九条江玲奈氏が取材に答えました」
江玲奈「この度は、まことに申し訳ありませんでした。責任はすべて私にあります」
江玲奈、深々と頭を下げる。
ニュースキャスター
「九条江玲奈氏は、10年前に失った妻をＡＩで再現するために、不正な観測を行っていたとのことです。次のニュースです……」
ニュースキャスターの声がフェードアウトする。空想上のカメラが、江玲奈の部屋にあるディスプレイ（ニュース映像が流れている）から部屋全体へとズームアウトする。部屋には江玲奈とレベッカとかなめが居る。
レベッカ「私が居なくても、元気でね。江玲奈」
江玲奈「レベッカも元気でね」
レベッカ「あのさ、かなめさん、最後に少しだけ、二人にさせてもらっていい？」
かなめ「特に急いではいないので、いいですよ。外で待っています」
レベッカ「ありがとう」
レベッカ「あのさ、江玲奈、最後の観測、もう一回見てもいいかな。途中でかなめさんが入ってきて、最初の方見られなかったから」
江玲奈「いいよ」
レベッカ「区切りを付けようと思って。これで全部でしょ？」
江玲奈「うん」
レベッカと江玲奈、座る。
研究室の観測装置が起動する。
部屋のモニターに表示された進捗状況が一〇〇％に達し、再生ボタンがポップアップする。
江玲奈は再生ボタンを押す。机の上にあるプロジェクターが部屋の壁に映像を映し出す。
空想上のカメラは、二人の後ろ姿、二人の間にあるプロジェクター、そして部屋の後ろに投影された観測結果を写している。徐々にカメラがズームしていき、投影された映像のみが画角に入るようになる。
江玲奈とレベッカは手をつないでいる。
上映会会場の江玲奈役とレベッカ役も、このとき手をつ

なぐ。
注記：上映会会場においてもレベッカ役と江玲奈役の人間の間にプロジェクターがあり、前方のスクリーンにこの映画が上映されているということを、読者の皆様には留意していただきたい。

S18　デザイナーベビーの養護施設
膝を抱えて部屋の壁にもたれかかり、じっと動かずにうずくまっている、黒髪の少女。ほかの子供たちはボールやトランプなどで楽しく遊んでいる。
黒髪の少女のもとに、金髪の少女が訪れる。
金髪の少女
「なにしてるの？」
黒髪の少女は黙っている。
金髪の少女
「あーそーぼっ！」
黒髪の少女
「いいの……？私と……？」
金髪の少女
「うん。だって、さみしそうだったから」
黒髪の少女、笑顔になる。
金髪の少女は手を差し出す。黒髪の少女は手を取って立ちあがる。
金髪の少女
「私はレベッカ。あなたの名前は？」
黒髪の少女
「くじょう、えれな」
金髪の少女
「えれなちゃんかぁ……じゃあ、エリーちゃん、よろしく」
黒髪の少女
「よ、よろしく」
二人は手を取って歩き出す。
画面が暗転。エンドロールが流れる。
主題歌：ハイパーリアリスト／パスピエ
拝啓　未来のある日の皆様へ
長くて短い手紙をしたためたんだ
届いていますか　覚えていますか
今日は記憶になってますか

何千回だって　何万回だって
もっとリアルに鮮明に描くよ
再現なんて　無理難題で
この一瞬のために生きてるだけだ

前略　思い出の中の貴方様へ
長くて短い手紙をしたためたんだ

大人になったら何をしてるかな
なんて語り合った夢を

何千回だって　何万回だって
もっとリアルに鮮明に描くよ
遮んないで　見てたいんだって
忘れないようにするので精一杯なんだ

宛名のない手紙が届くまで

何千回だって　何万回だって
もっとリアルに鮮明に描くよ
何千回だって　何万回だって
忘れないようにまた描くよ
何千回だって　何万回だって

S19　江玲奈の部屋・廊下
エンドロールののち、江玲奈とレベッカは立ち上がる。
レベッカ「じゃあ、またね」
江玲奈「うん」
　レベッカ、部屋を立ち去る。
かなめ「もう、いいですね」
江玲奈「はい」
　江玲奈は指輪を外して机の上に置く。
　江玲奈、部屋のドアを開け、かなめとともに出ていく。
　外は晴れていて、廊下にはガラス張りの天井から日光が降り注ぎ、青空が見える。

fin